

## 子どもの社会化と教育

### ―青梅市の事例を中心として―

はじめに

神山敬章

この論稿は、「子どもの社会化」についてのものである。教育の中において、子どもの社会化過程は、なかでも重要な役割をはたしているが、私は今まで子どもの社会化と教育の関係について、青梅市において、一連の調査を進めてきたので、この調査事例を中心として、この問題の要点をまとめ説明を加えていきたいと思う。

#### 一、社会化理論の展開

今日、「社会化」という概念はきわめて多義的に使われているがこれはジンメル（注1）の「社会はいかにして可能であるか。」の問いから始まる。彼は、社会は複数の個人が何らかの目的、関心、本能を満たそうとして、お互いに心的相互作用の中に入りこむところに成り立つと述べている。つまり、社会とは人間の単なる集合体組織ではなく、人間がお互いに心理的に接触、交渉して意識や行動の中に何らかの影響を現していくところに、その本質をもつというのである。個人の目的、関心、本能に促されて個々人がお互いに共同したり、助けあったり、もしくは反対するというような相互的な関係の中に入り込むというところに社会が成立するのである。存在するのは、社会でもなく、個人でもないのであって、諸個人の心理的相互作用があるというのである。彼は、この場合、諸個人が社会生活の一員になるところの目的や関心や本能を「社会化」の内容とよんだのである。この内容的心的相互作用という社会化の形式を通して実現されていくところに初めて現実の社会生活が展開すると考えたのである。つまり社会を社会たらしめるのは、社会化の過程とその形式であって、「社会の社会化」であると考

えられるのである。しかしそれは同時に「個人の社会化」への布石でもある。この考え方からスモール（注2）は Socialization という言葉を用い、さらに、ギディングス（注3）は Socialization 概念を通して「個人の社会化」の方向へ展開していったのである。そして一九四〇年代以後は、もっぱら、「個人がある特定の社会集団の生活様式を学習し、その集団の正規の成員にしあげられる過程」という意味になったのである。

さらに、パーソンズ（注4）は、「社会化」を社会体系論における主要概念の一つとして位置づけ、社会体系の維持機能の二つの柱は「社会統制と社会化メカニズム」であるとし、とくに社会化は、個人の社会的位置づけや役割獲得の過程であって、社会体系がこの機能をもつことなしに、その維持存続はありえないと述べている。さらに、社会化を、社会的対象（客体）のシステムが、個人（主体）に内面化していく過程であり、その内面化した対象システムが個人の中に分化していく過程であるとしている。

これらの社会化理論の展開から私は、「子どもの社会化」を次のように考えるのである。

「子どもの社会化」とは、児童が特定の社会に生れ、成長していく過程において、その社会の成員となるためにふさわしく、又必要と考えられている諸種の習慣的行動様式ないし、習慣を身につけていく過程をいうのである。それは、社会の側よりみれば、その社会に特有な文化を維持し、それをのちの世代に伝達することに関係する過程であり、個人の側よりみれば、その社会において承認された規範的行動様式への同調によって社会に適應していく一種の学習過程であるといえる。社会化の具体的内容はもとより、その社会化の行なわれるテンポ、期間、連続と非連続、一貫性の程度などはそれぞれの社会において異なると考えられる。又、社会のために利用される手段、たとえば、賞罰の種類やその与え方にもそれぞれの社会の特徴が認められる。一般に社会化の過程は広く社会の他の成員との間に行なわれる相互作用の合成的影響のもとに進行すると考えられるが、今日の社会ではとくに、その個人の家人や両親が成人社会の規範を児童に伝える当事者として大きな影響を与えている。たと

えは、食事・排便・性行動・感情反応などにみられるその社会の習慣的行動様式の獲得過程は、普通両親の指示とコントロールのもとにおかれていることが多い。又、両親の他にも、教師や各組織の指導者の影響もみのがすことができない。

## 二 青梅市における調査

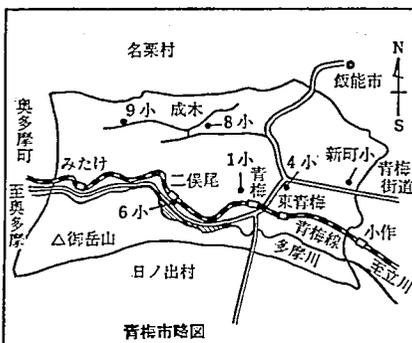
### 1 調査の概要

今まで述べてきた社会化理論を基盤として青梅市における子どもの社会化と教育についての調査を試みた。この調査は、昭和五年一月から五二年一月にかけてと同年九月から一二月にかけての二回行なわれたが、本誌上では、第一回目の調査を中心に説明する。

子どもを対象とする調査を実施するにあたり、対象を六年生児童とし、次の方法で調査を進めた。(1)既存統計資料の分析、(2)各小学校六年生対象の質問紙調査、(3)各小学校六年生対象家庭での聞きとり調査、の三方法である。小学校は、第一小、第四小、第六小、第八小、第九小、新町小の六校である。そして対象児童数五五二名中で五三五名(九六、七%)の回答を得た。

### 2 青梅市の概況

青梅市は、東京都の中心部から西へ約五〇キロメートル、多摩川中流域に臨む面積一〇四・〇一平方キロメートル、世帯数二五、二〇一世帯、人口九〇、六八九人(昭和五年一〇月現在)を容する中規模弱の東京都下の都市である。現在の青梅市は、一九五一年に西多摩郡青梅町が、調布村、霞村を合併して市制を施し、さらに一九五五年、小曾木村、吉野村、三田村、成木村の四村を編



入して形成されたものである。多摩川が関東山地より武蔵野台地に流れこむ所に発達した谷口集落であり、西部に一〇〇mをこえる山地をかかえ、東に高度を下げ、三〇〇m級の丘陵地帯となり、西高東低の地形をなしている。国鉄青梅線や青梅街道が、市の中心部を東西にのび、古くから機業地として南側の八王子、北側の所沢、川越とともに発達した所で、特に青梅縞、青梅綿は有名であるが、現在ほとんど生産されていない。又、大都市東京の通勤圏として一九六五年以降急激に人口をふやし、この一〇年間は、人口が一・五倍、世帯数が二倍と東京のベッドタウンの傾向を持つようになり、工業団地の開発や丘陵地の宅地造成で徐々に都市化が進んでいる地域である。奥多摩山塊に属している御岳山、高水三山などは秩父多摩国立公園内にあってシーズンの日・祭日には登山客や行楽客でにぎわっている。

このように青梅市は、大都市東京下の一都市として存在し、青梅線沿線は住宅地として発展しているが、反面、山で囲まれた地域は、人口の移動がなく、地域としての発展もなく、いわゆる過疎化した地域になっている。青梅市は、青梅町以来の市街地と宅地ブームにのった住宅地、工業団地、そして旧来からの農山村地をかかえる都市である。そして変動期の中にあつて、様々な問題をかかえている伝統のある地域である。このような背景から、かつ本学からも比較的近いという条件により、私は、子どもの社会化と教育の調査地として選んだ。

### 3 家族構成と学習環境

青梅市における人口、世帯数は昭和五二年一〇月現在で人口九〇、六八九人、世帯数二五、二〇一世帯で東京都の平均一世帯当り二・九二人に対して、三・六人と高い値を示している。これは、小家族から核家族へと移行している東京都より、核家族化がそれほど進んでいない傾向を示している。だがこの内容を詳細にみれば核家族化への傾向を示しており、この点において、子どもの社会化過程における家族の影響が現れると思われる。調査における家族人員は、各小学校別には表Iにみられる通りである。家族人数の四人と五人との二つにピークがみられるが、人数が多くなるにつれて少なくなっているのは、現代家族の一般的特徴である。又、兄弟数に

表 I 家族数

	第1小	第4小	第6小	第8小	第9小	新町小	計
1. 2人	0	1	0	0	0	0	1
2. 3	50	21	2	0	0	5	78
3. 4	301	112	20	0	0	63	14.5
4. 5	59	76	4.05	13	0	45.6	204
5. 6	356	4.05	2.86	592	0	6.3	381
6. 7	7	61	324	227	5	19	215
7. 8	42	18	25.7	5	5.00	241	115
8. 9	32	20	10.6	2	1.00	139	84
9. 10	193	9	25.7	91	4	89	157
10. 11	60	48	129	45	4.00	7	40
11. 12	10	0	4.3	0	0	1	10
N·A	6	0	0	0	0	1.3	18
計	166	188	70	22	10	79	535
	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

表 II 兄弟数

	第1小	第4小	第6小	第8小	第9小	新町小	計
1. 1人	10	19	4	0	0	5	38
2. 2	6.0	1.01	4	0	0	6.3	71
3. 3	543	90	46	14	4	51.9	285
4. 4	90	47.8	658	637	4	4.00	533
5. 5	53	58	21.4	7	4	32.9	163
6. 6	319	30.9	5.7	318	2	2.00	305
7. 7	11	16	8.5	0	2	6	39
N·A	0	3	1.6	0	0	1	5
計	166	188	70	22	10	79	535
	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

ついても、表Ⅱに示す通りであり、二人・三人が最も多く、家族構成人数と同様の結果が出てくる。このような傾向は、青梅市が、東京の通勤圏としての住宅地域となり、新しい都市化への傾向を持つことを強く示したものと考えられる。家族形態も拡大家族から小家族、核家族へ移行している。なお、これは、農山村地域よりも、住宅地域や市街地地域に見られる傾向である。又、兄弟数に関連し、長男・長女の占める値が全体の約半数おり、特に住宅地が急にふえつつある、第四小、新町小地域での値が多く、若い世帯の転入が多いと考えられる。同様に、次男・次女も三七・七％を占め、小家族の傾向にあるのが分かる。次に、祖父母との同居の割合であるがこれは、注目すべき点である。というのは、小家族・核家族の多くなっている中で、家としてのしつけ、慣習が祖父母の影響によって子どもの社会化過程では重要と考えられるからである。同居の割合は、祖父二三・九％、祖母三二・四％と祖母が上回っている。別居は、祖父二五・四％、祖母三五・一％となっており、特に、祖母の同居率は、第一小地域での四一・〇％と高いのが注目される。この地域は、市の中心部であり、農山村地域と同様に、人口移動が少なく、古くからの家族が住んでいるところに原因がある。やはり、これらの地域では、後に述べる家庭でのしつけなどの面でも祖父母の影響が強くているのである。

次に学習環境であるが、子どもが自分の勉強部屋を持っているかどうかの問に対しては、全体の六〇・七％の者があると答えている。これを地域別にみると、市街地、住宅地ではもっている者が多い傾向にある。農山村では、家族構成上や家の間どり等の問題で共同で使っている者が多い。又、部屋に関連して、自分の専用の机の有率は、全体で九五・九％とほとんどの者が机を持っていることが分かる。これは、社会化過程の中で教育環境が大きなウェイトを占めていることから質問したものである。

又、学習塾などへ通っている者の割合は、四人に一人の割合である。通う理由としては、「親がすすめるから」二四・九％、「友人がいくから」八・九％、「受験のため」四・五％となっており、親の子どもに対する期待と心配や、子どもの友人関係の延長上にある塾の存在が分かる。青梅市内には現在五〇軒ほどの塾、ソロバン塾、

書道塾があるが、市街地地域の者やそこに近い者は多く通い、交通の不便な農山村地域の者はあまり通っていないのが現状である。これらの塾は学校での学習内容とは別の存在であり、ある意味において、子どもの社会化過程における、一般的知識・教養・競争心・相互作用などに関係する重要なものと考えられる。また、親の学歴が高くなればなるほど子どもに対する社会化過程の中の教育に重要な意味を見出すことになるのである。

つまり、子どもの社会化過程の中で学習環境としての学校、家庭、地域社会は重要な位置を占め、また親や教師の指導の責任も重大なものとなっている。これは、過去も現在も同様であるが、それぞれの立場にたつて子どもへの社会化過程の伝達者として存在し、担い手の責任をはたさなければならないのである。

#### 4 家庭生活環境

子どもの家庭での時間の過し方は主に下校後であるが、勉強、遊び、テレビに大部分を費やされてしまう。この中でテレビは、現代の子どもとは縁の深いものとなり、青梅市では、下校後三四分の者がテレビにかじりつき、又一日の平均視聴時間が三時間以上の者は全体の七〇%以上おり、注目される。N市Kの調べでは、子どもの一日の平均視聴時間は平日で二時間半、日曜日では四時間であるということ、青梅市の子どもも全国的な水準にある。このテレビの影響は、社会化過程の一つの担い手であるテレビが、子どもを運動不足に追いやり、近視・肥満児を作り上げ、子どもらしさの驚きや感動も忘れさせてしまう「精神の植物化」推進の大きな力として存在している点にあり、大きな社会問題にもなっているのである。つまり、テレビは、豊富な知識と教養を与えてはくれるが、片や子どものパーソナリティーの変化をも生じさせてしまっているのである。

その他の者は、塾へ通っている者もいる。全体の二五%の者は下校後、塾へ通っているのである。これも、テレビ同様、現代社会における傾向である。

家での手伝いは、どの家庭でも一応、何らかの形態で行なわれている。一番多いものは、おつかいの五一・二%で、次いで食事のしたく二七・五%、そうじ二五・四%、食事の後かたづけ二四・七%となっている。地域的

には、第九小地域はおつかいが〇%である。これは、この地域には商店がなくおつかいに行けないのである。つまり、地域によって、生活様式・環境のちがいが家での手伝いの内容を変化させているのである。そして、家の手伝いは、昔の形態とはちがって時間の多くかからないもの、又労働力のあまり必要としないものへ変化して、これが子どもの自由時間を多大にしているのである。この自由時間は、塾などの時間や、テレビ・遊びの時間に回されており、子どもの社会化に結びついているのである。

次に、しつけなどの面では、だれによく注意されるのかの間に対して表Ⅲの通りであるが、母親の七七・四%が多く、次いで父親の二二・四%である。つまり両親が全体の九〇%以上を占めているのであるが、祖母の存在も低い値であるがみのがせない。傾向としては、子どもの身近にたえずいる者が社会化のしつけの担い手として存在するのである。又、どんな時によくしかられるかは表Ⅳの通りである。項目別にほぼ同数であるが、しかられる内容は、青梅市のみの傾向ではなく全国的なもので、テレビ、勉強、態度、遊びといった項目が主である。親が子どもに対してしかることは、それだけ子どもに期待をかけているからであり、早く社会の一成員としての自覚を持ってもらいたいからである。ある意味においては、しかることはおこることは異なり、子どもを理性の上から導びき教えるものであり、社会化過程の上に必要なものとして存在するものである。それぞれの家庭は地域性・歴史性、社会性をもって子どもの社会化に取りこんでいるのである。

##### 5 青梅市成木地域

成木地域（旧成木村）は、青梅市の中心より北へ約二〇キロメートルの所に位置し、北は埼玉県名栗村、飯能市との境である。成木は大きく上成木・下成木・北小曾木に分れ、さらに上成木上分・下分・下成木上分・下分に分かれている。私はこの上成木上分の第九小学校学区に関して調査を実施した。この地域は農山村地域であり、人口移動は少ないが過疎現象の見られる所である。この地域における子どもの社会化と教育を、青梅市内の市街地と比較しながら述べていきたい。

表Ⅲ だれによく注意されるか

	第1小	第4小	第6小	第8小	第9小	新町小	計
1. 父	40	241	43	229	21	300	3
2. 母	128	771	151	803	45	643	18
3. 祖父	4	24	0	0	1	14	0
4. 祖母	6	36	3	16	2	29	0
5. 兄弟	7	42	2	11	1	14	1
6. その他	6	36	0	0	0	0	0
N・A	3	18	3	16	0	0	0
計	166	※	188	※	70	1000	22
							1000
							10
							※
							79
							※
							535
							※
							11

※は複数回答のため100%をとえる

表Ⅳ どんな時に家族の人からしかられますか

	第1小	第4小	第6小	第8小	第9小	新町小	計
1. テレビをみすぎた時	52	313	37	197	38	543	169
2. 勉強しない時	66	398	82	436	48	686	258
3. 手伝いをしない時	54	325	43	229	41	586	176
4. 遊んで遊ぶしつづける時	56	337	47	250	31	443	169
5. いじめをうけた時	89	536	77	410	53	757	282
6. ことば使いや礼儀の悪い時	68	410	78	410	38	543	229
7. その他	16	96	18	96	1	14	47
N・A	0	0	0	0	0	0	0
計	166	※	188	※	70	※	535
							※
							10
							※
							79
							※
							535
							※
							87
							0

※は複数回答のため100%をとえる

この地域は、九つの集落から成り立っており、集落を「組」と呼んでいる。この地域の小学校、第九小学校は、明治初年に開校し、現在に至っており、地域住民は、教育熱心な所である。人々の生活は、昔は林業、石灰搬出が主な仕事であったが、現在は專業林家二軒をのぞいてほとんど他地域に通勤している被雇用者である。この誌上では、第九小学校と地域の問題をとり上げ述べることにする。

第九小学校は明治六年に開校し、現在、学級数六、児童数男子二三名、女子一五名の計三八名の小規模な学校であるが校舎は鉄筋三階建てであり、プールも完備された近代的な学習環境にある。一学級当りの児童数は青梅市の平均三五・七人に対し六・三人と低く、教員の一人当りの児童数も青梅市の平均二六・二人に対し四・二人と市街地の学校とは大きく異っている。社会化の機関としての学校の役割は、人数が少ない分だけ理想に近くなるかといえそうではない。つまり、第九小学校は自然的環境には恵まれているが、児童構成数の少さが学級経営を困難なものにしているのである。一学級一学年編成であるが、一学級一〇人以下では、クラス替えもなければ、学級討論会もままならない。そして、外的刺激が少ないため、おとなしく、競争心があまりなくなっている。同学年では幼稚園から小学校六年まで同クラスで、能力も順位が決してしまう傾向にある中で、真の子どもの教育がなされるかが問題である。つまり校長先生も指摘するように「発表力のとばしきにつながる危険があり、又友人が限られる中で閉鎖的な性格におち入りやすい。」といったことも現れる。このことは、成木九小地域の地域性の問題であるが、子どもの教育に關しては、社会化の担い手である教師が人数の少ない中で効果のある指導を試み、絶対数は少なくとも、四〇人のクラスにまけない内容を持った教育をする必要がある。発表力や、批判力をこのような形で補なうことはむずかしいことであるが、学校と地域が一体となり、子どもの社会化過程の道をきつことがこの地域における社会化の一部としての学校教育の任務であると考えられる。実際の生活では、市街地地域との格差はあまり感じられなくなったが、しかし地域社会としてのまとまりは今なお強いものがあるのでこれを生かし、学校が地域のコミュニティーセンターの役割をはたし、地域一体となった教育を行うことが

成木地域の将来へつながると確信する。

おわりに

青梅市調査の事例を中心に子どもの社会化と教育について述べてきたが、青梅市は、現代社会の変動過程において、様々な問題を抱えている。この中で、子どもの社会化過程がいかに重要であり、教育もまた同様であると考えられる。今後、この調査を出発点として、私の研究も継続して「子どもの社会化と教育」を考えていきたいと思う。

〔注〕

- 一 Georg Simmel 1858～1918
- 二 Albion Woodbury Small 1854～1926
- 三 Franklin Henry Giddings 1855～1931
- 四 Talcott Parsons 1902～

〔参考文献〕

T・パールソンズ著 橋爪貞雄他訳

「核家族と子どもの社会化」上・下、昭和五一年一月、黎明書房。